

心房細動による脳卒中を予防

ボストン日本法人が器具発売

米医療器具大手の日本人、ボストン・サイエンティフィックジャパン（東京・中野）は、心房細動が引き起こす脳卒中を予防する医療器具を国内で発売した。心臓内で血液の塊（血栓）を作る部位に挿入して使う。血栓が脳に入り込むことを防ぐ効果があり、薬の長期服用もやめられる利点がある。

心房細動は心臓の上部の2つの部屋（心房）が小刻みで不規則に震える病気。不整脈の一種で「国民病」といえるほど患者が増えている」（国立循環器病研究センターの草野研吾医師）。国内の患者数は80万人を突破し、2030年には100万人を超えると予想されている。

心房細動が怖いのは脳卒中のリスクを高めることだ。心臓内で血液がスムーズに流れずによどみ、血栓ができる。その血栓が動脈を通して脳に移動し、血管をふさぐことで脳卒中が起こる。心房細動患

者の約3分の1が脳卒中を発症するともいわれる。

発売した医療器具「WATCHMAN（ウォッチマン）」は金属のフレームとプラスチックの薄膜から成る。大きさは500円玉大だ。カテーテルの先端に付けて太ももから体内に挿入。心臓まで運び、左心房にある「左心耳（さしんじ）」に留置する。

左心耳は心房細動による脳卒中をもたらし血栓の約90%を作り出す部位だ。留置されたウォッチマンには細胞が集まり、やがて左心耳を完全にふさいだ状態になるため、左心耳で血栓が作られて脳に流れるのを防ぐことができる。

治療は全身麻酔で1時間ほどで終わり、翌日には退院できるという。

治療薬「ワルファリン」の服用をやめられる利点もある。ワルファリンは血液が固まらないようにする抗凝固薬。血栓ができるのを防ぐ目的で心房細動患者に対して使

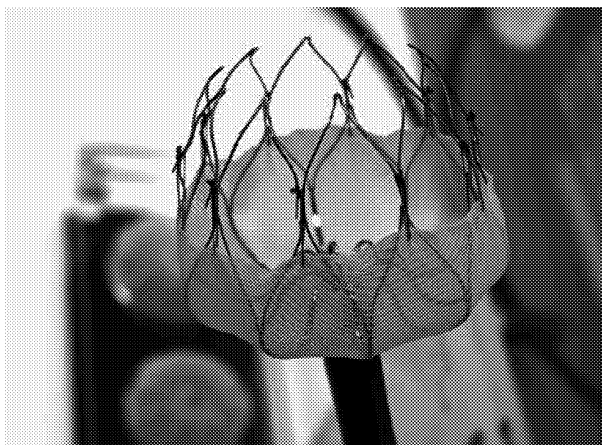
う。

ところが血液が固まらないことで、血管からの大出血や出血性脳卒中を起こしやすくなる。つまり「脳卒中を予防しようとする」と出血リスクが高まるジレンマがある」（国立循環器病研究センターの草野氏）。ウォッチマンが画期的なのは、ワルファリンの服用が不要になり、このジレンマを解消できることだ。

臨床試験では、ウォッチマンで治療した患者の92%が4日後にワルファリンの服用を中止できた。出血リスクもワルファリンを長期服用する患者に比べて半分以下に減ったという。

欧米などでは発売済みで約10万人の治療実績がある。日本では今年9月に保険収載され、147万円の価格が付いた。短期的にはワルファリンを投与しつつも「出血リスクが高く長期服用を避けたい」といった患者が対象になる。

（大下淳一）



医療機器「WATCHMAN」の大きさは500円玉大。左心房に挿入する

